

## 橋本達雄著『万葉集の作品と歌風』

## 阪下圭八

本書は、私の数えたところでは、橋本達雄氏の七冊目の著書にあたる。一九七五年、『万葉宮廷歌人の研究』を世に送って以来、著者は、七八年に共著『注釈万葉集〈選〉』、八四年に『謎の歌聖柿本人麻呂』と『大伴家持』を、八五年に『万葉集全注 巻第十七』および『大伴家持作品論攷』をと、あい次いで着実な足どりで労作を公にしてきた。——十六年間で七冊、この数は流行作家などの場合はいざ知らず、研究者の世界ではやはり注目にあたいするものといえよう。もちろん、右は三十余年にわたる著者の研究生活の果実に他ならないが、にしても右七冊のうちの過半がいわゆる書きおろしに属し、しからざるはA5判四百数十頁から五百頁を超える大著となっており、その総体はなまなかでない質量感をもつて見る者に迫ってくる。

今回の新著を手にした折、まず私の心に去来したのは右のようなことでもあった。少なからぬ年月、著者と親昵させて頂いている身にとり、その間の氏の精進と丹誠、意欲的な志向の持続に思いを馳せずにはいらなかったのである。

さて、本書は次のとおり構成されている。かなり多面的とい

うべき本書の内容を誤りなくうかがうには、その目次をかかげるのが早道であろう。

## 作品篇

斉明天皇の御製

額田王三題 作品の美しさ・集団と個・その生涯

額田王から人麻呂へ

柿本人麻呂の作品 天地の初めの時・石見相聞歌の構造・泣血

哀慟歌の諸問題・羈旅歌八首と風土

大津皇子・大伯皇女の詩歌 後人の仮託か否か・二人行けど行き過ぎ難き秋山——大伯皇女の歌一首の発想——

山部赤人——自然風詠の宮廷歌人——

山上憶良——人麻呂への反逆——

田辺福麻呂と宮廷歌

大伴家持と二十四節気

## 歌風篇

万葉歌風の誕生 第一期の歌風と作家・額田王の位相

万葉盛期の歌風

大伴旅人・山上憶良の作風——巻五作者不明歌の帰属をめぐる——

万葉以後六歌仙以前の歌風

万葉風と平安和歌

万葉風と近世和歌——賀茂真淵を中心として——

万葉の花鳥風月

雑考篇

上代文学研究の展望

万葉史と政治

枕詞と喩法

思国歌

万葉集と葬制

万葉集巻五の筆録者について

「作品篇」では、初期万葉にはじまり額田王・柿本人麻呂に重点を置きつつ、赤人・憶良・福麻呂・家持に及ぶ。万葉の基幹をなす部分が妥当なスペース配分でおさえられているといえよう。

「歌風篇」は「作品篇」と相補の関係にたち、万葉ぶりの誕生と展開が作に即しながら記述され、平安・中世・近世に到るまで、その水脈・余響がたどられる。さらに「雑考篇」が研究史、万葉史と政治、枕詞、記紀歌謡、葬制、筆録者の問題といった、万葉研究上・解釈上の重要項目を説く。——あえて粗雑な要約を施せば以上の次第となるのだが、さてこうした本書の特色ないし持ち味を一言にいう時、それは万葉歌一首一首との懇切なふれ合いを土台とする作品研究ないし文学史論としてよいのではなからうか。

著者は前記した『大伴家持作品論攷』の「あとがき」において、「歌人家持の全貌を知るには作品を読む以外に道はないと信ずる立場」で書きすすめた旨を述べている。これと同趣旨の発言は『柿本人麻呂』の「あとがき」にも見え、この立場が氏の研究のすべてに通ずるとみなして差支えあるまい。作品をいかに感知しよみとくか、が文学研究の第一歩でありかつ究極の目標だとするなら、氏の姿勢はまさに王道をゆくものといえ、前後三十年間にわたる業績を収めた本書にその誠実な足跡をうかがうことがで

きる。

橋本氏の学風がよく示されていると思われる一篇を紹介してみよう。

柿本人麻呂のいわゆる「石見相聞歌」はこの宮廷歌人の一方の代表作で、詩的興趣に富むと同時に種々の問題を孕む作だが、氏がこの歌の二群にわたる構造とその内的連関を見事に分析されたのが「石見相聞歌の構造」である。まず氏はA B二群のよみ口の相異を句々の細部について検証し、前者での「妹」中心と後者での「吾」中心という対応し合う関係を見定めた上で、総数九首に及ぶ該作の推敲形成の過程を概括する。ここまでの行論、中西進・伊藤博・神野志隆光氏らの諸説にふれつつ大局的には等しい方向がとられている。氏は氏の観点を持しながら、こんなにちの通説をかたちづかったものとしてよからう。

さらに著者の面目が発揮されるのは、あまりにも有名な反歌「笹の葉は御山もさやに……」の位置と役割を論じた後段部分に存する。その論旨をここに手短かに尽すことは困難ながら、「いわばこの一首はA群の舞台をB群の舞台へ引き廻してゆく軸の如き役割を担っている」との言を引いておきたい。右の歌まず石見相聞歌群中、もっとも完成度の高い秀作たること衆目の一致するところなはずだが、その独特な力にあふれた風姿は、氏の説くようにA B全篇にあいわたる結節点に位置せしめるとき、総体との交響的效果とともに感得できると思われる。

つまり氏の学風の特徴を、常に具体的な個々の表現への愛惜や異和から発しつつ、先行諸説への周到な目くばりのもとに、作品

をより大きな文脈においてよみといてゆく、そういったものと約言できようか。その意味では、「人麻呂と持統朝」(「文芸と批評」第三、四号、64年)によって学界へ登場した橋本氏の志向は終始一貫した軌跡を描きつづけてきたといえる。右論文は人麻呂という稀有の文学現象を、持統朝という時代のふところにおいてよみとこうとしたものだからである。

ところで本書の「あとがき」には、刊行を思い立った経緯にふれ、「併せて還暦の記念にも」との旨が述べられている。当然ながら本書にはひとつの中仕切りとしての性質もあって、総集的な内容を示すわけだが、必ずしも氏の近業のすべてを取めてはいない。たとえば「万葉集編纂の一過程」(『万葉集研究』第十六集、88年11月)、「万葉集巻七について——雑歌部の資料と編纂——」(『上代文学』第六十三号、89年11月)をはじめとする一連の万葉

集編纂・成立の論がこしばらく手がけられており、その方面の論稿は、なお今後の著書に収録される計画と推測される。完成の晩には学界に多大の刺激をもたらすことまづ間違いなく、橋本氏の万葉学はさらにあらたな奥行きとひろがりを獲得するものと思う。

氏の仕事の総体からするなら、そうしたこれからの展開への力を充分に残した中間的総括が、本書『万葉集の作品と歌風』に他ならず、それだけに著者の自愛・加餐の上の御活躍を切に願わずにいられない。

まことに難雑かつ中途半端な物言いに終り申しわけない。さぞかし見当違いも多いはずだが、海容を乞うて擲筆する。(平3・2 笠間書院 A5判 四五七頁 一二八七五円)

## 新刊紹介

中世歌合研究会(井上宗雄・  
今井明・兼築信行ほか)編  
『中世歌合伝本書目』

中世の歌合資料は、研究者の個別的な努力によってかなり多くのものが紹介され、

その重要性も広く認識されつつある(主要なものは先年『新編国歌大観』第五巻に収録された)。本書は十二人の研究者が全国の文庫を博搜して網羅的な伝本調査を行った成果の公刊である。鎌倉・室町期の歌合で一部分でも本文を遺すもの(含古筆切)総計二百六十七ヶ度につき伝本の所在を記し、年時順に配列する。各歌合には催行年

(平3・6 明治書院 A5版 四二三頁 九八〇〇円) [浅田徹]